

題：「生存領域の縮約」

変化：過去100年に住宅は高気密高断熱化した

予測：20年後に[環境は激化する]

[情報技術は発展する]

[個人主義は加速する]

仮説：住宅はよりコロニー的になる

説明：過去100年続いた、住宅を閉じた系とするような運動は今後も続くと考え。コロナ禍において、社会活動が住宅からリモートで行われたことは一過性の出来事ではなく、時代のある種の先取りであると考え。つまり、厳しい環境、情報技術、個人主義は住宅の閉鎖系化を加速する。究極の閉鎖居住系とは、最も非生命的な環境＝宇宙空間に作られた閉鎖生態系＝スペースコロニーである。20年後の住宅は、今の住宅とスペースコロニーの中間に位置すると予測する。

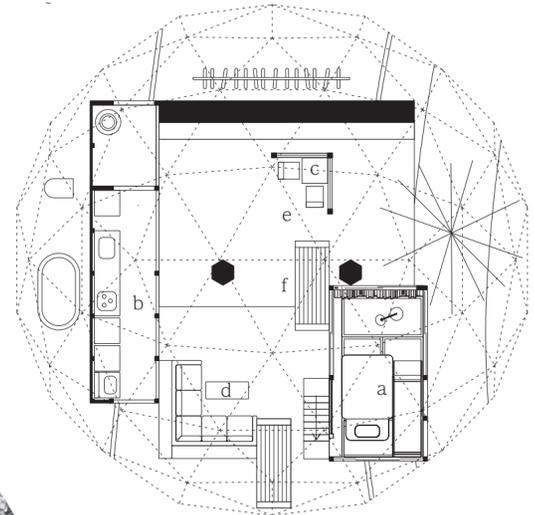
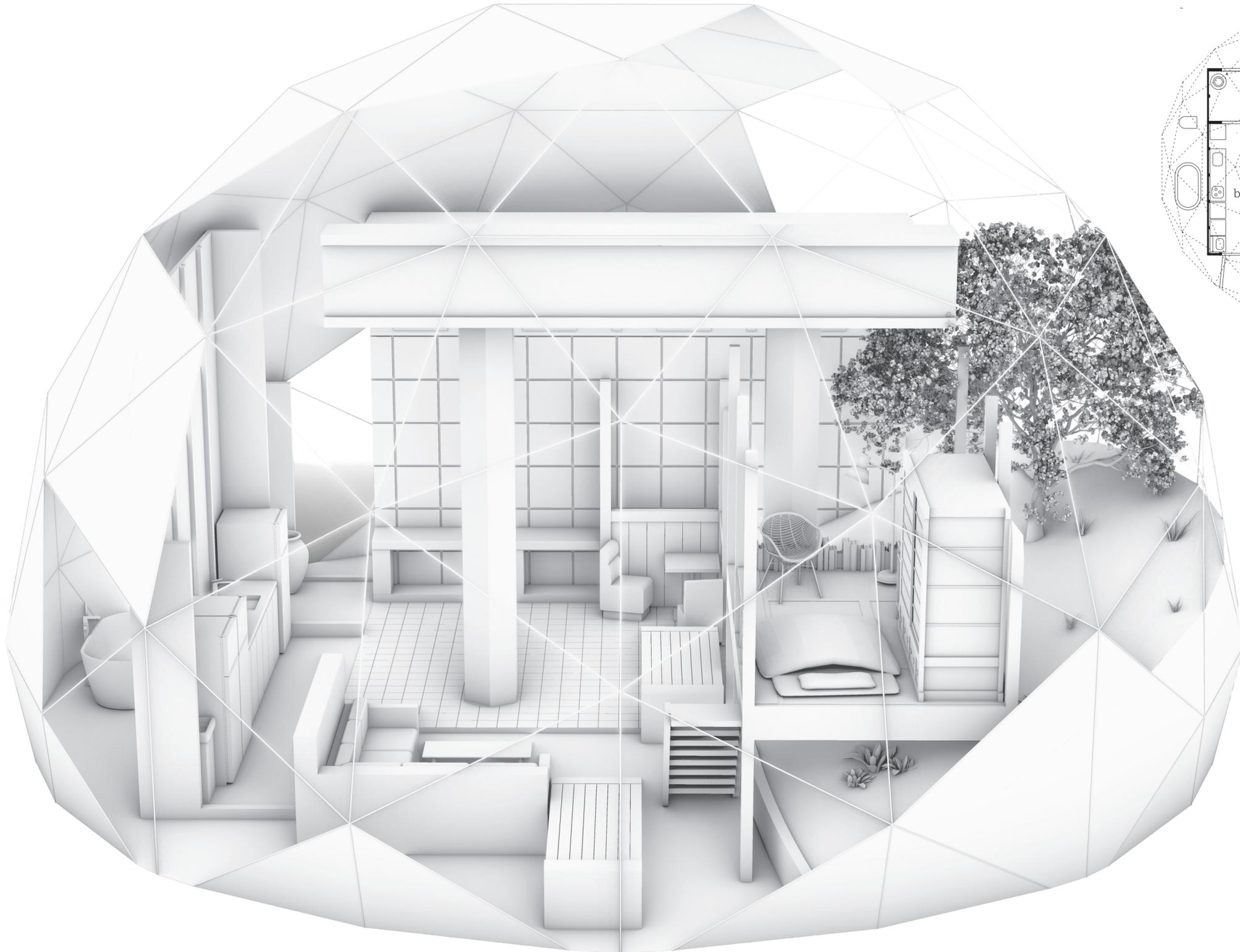
補足：中国SF小説の金字塔「三体」シリーズ三部作(著:劉慈欣)には、スペースコロニーにおける人間心理の興味深い描写がいくつか見られる。

「三体2」アクシデントにより地球に帰還できなくなり、何千年もかけて遠い星系を目指すこととなった恒星間航行船の船員たちは、その事実が分かった途端に誰ともなく船内に緑地や水場などの地球の自然環境を模した場所を作成しはじめた。

「三体3」スペースコロニーにはいくつかの類型があるが、施工性、強度、防護性、遠心力による擬似重力の発生のしやすさ、拡張性などを鑑みると車輪型が最も合理的である。しかし、「我々は同じ一つの世界に居住しているという感覚＝世界感」のために、居住区域が内部から一望できるシリンダ型や球体型が多用される。

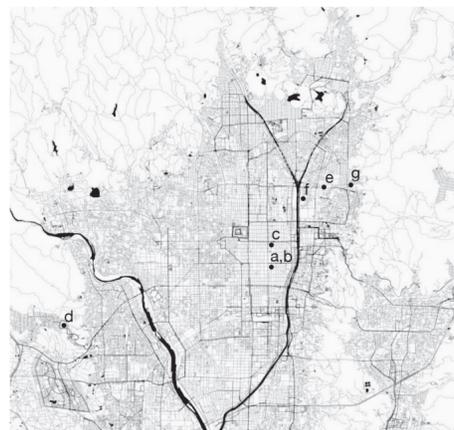
手法：今の生活領域を一軒の家に縮約する

説明：20年後の住宅の姿を直接描くことは困難であり、過分にファンタジーとなる。よって、現時点で入手可能な情報をもとに、20年後の住宅の姿のある側面を端的に可視化することを目的とする。そこで、都市に散在する筆者の主要な生活空間を測量、蒐集し、断片化されたそれらを戸建て住宅の平均面積である約30坪の領域に集めてひとつの全体を作成する。これは未来への仮説をもとに、現在を対象として作成された住居であり、それゆえに未来の住居の性質を間接的に指し示していると考えられる。さらに言うならば、この案は20年後の未来の自分へ向けての手向けであり、2024年の筆者の生存領域のタイムカプセルでもある。

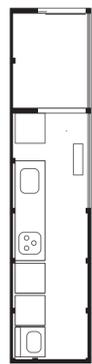


g

- a: 京町家の自室 1:100
- b: 京町家の通り庭 1:100
- c: 喫茶店の角の席 1:100
- d: 研究室のソファ 1:100
- e: 大学のコリドー 1:100
- f: 鴨川のベンチ 1:200
- g: 計画平面図 1:100



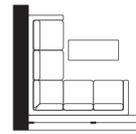
a



b



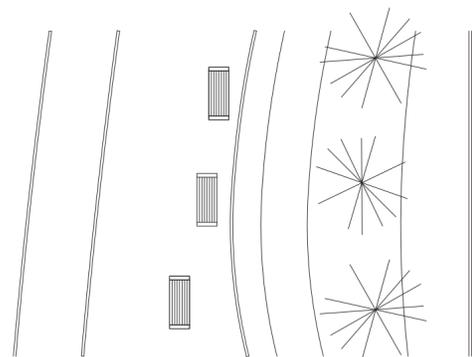
c



d



e



f